

伝書鳩

第12号



井上靖記念文化財団

青葉

井上靖

この世にまだ神があった時代、一人の忠臣が木の下蔭に馬を留めて、己が子に後事を託して別れて行く話は、誰が作ったか知らぬが、木の下蔭の仄暗さと、そこを渡って行く風の爽やかさの故に、私は好きだ。ひと組の父子の青葉に包まれたドラマの悲しさもさることながら、仄

暗く爽やかな小さい空間の設定はみごとである。今はこの世から神は姿を消してしまっただが、その空間だけは私たちのものだ。私は愛犬の小屋を木の下蔭に置き、幼い孫娘の小さい机を木の下蔭に置く。私の幸福もまた別離とは無縁ではないのだ。

(『季節』より)



青葉（詩） 井上靖……………2

ご挨拶 井上修一……………6

モントリオールと北京ダック 原田真人……………8

『北の海』と高専柔道の魅力 菊地勝義……………16

鳩のおしらせ①……………21

井上靖未発表資料*3

戦地での創作メモ（監修・解説 曾根博義）……………22

鳩のおしらせ②……………39

父の休息 家族の撮った写真から⑤ 井上卓也……………40

私の備忘録より 浦城いくよ……………44

鳩 図書だより①……………55

平成二十二年度 事業報告 井上修一……………56

鳩 図書だより②……………61

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子
奥付のカット 岩永泉

本財団は父の亡くなった翌年、つまり、平成四年の三月四日に設立されました。したがって、平成二十二年度は設立二十周年の年でした。二十年にわたり、皆様から絶大なご支援、ご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。二十三年度現在は、政府が進めております財団法人改革の動きを受けて、来年度から一般財団法人に移行すべく、内閣府への申請に向け書類の準備を進めております。今後とも変わらぬご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、既報の通り、世田谷にある父の家の一部が旭川市立井上靖記念館の隣接地に移築され、市により末永く維持保存されます。今年の五月から八月にかけて、移築のための解体・搬出作業が行われました。搬出されたものは苫小牧の防疫施設で燻蒸された後、旭川に運ばれ復元されます。来年の父の誕生日、五月六日を目標に一般公開される予定です。

今年も父の作品の映画化・演劇化のニュースが続きました。「わが母の記」が原田真人

監督のもとで、役所広司、樹木希林、宮崎あおい氏らの出演によって松竹で映画化されることはすでにお知らせいたしました。その撮影が、年初から三月に掛けて、世田谷と軽井沢の父の家をロケセットに行われました。父が人生の後半を過ごした二つの家が、作品とともに映画として残る幸運に恵まれたわけですね。この映画は今年のモントリオール世界映画祭で審査員特別グランプリを受賞し、釜山国際映画祭のクロージング作品にも選ばれました。平成二十四年のゴールデンウィークから一般公開されます。

その他にも、短編「凍れる樹」が中部日本放送の開局六十周年記念作品として、同じく原田真人監督のもと、役所広司、中越典子氏らの出演で製作され、「初秋」と題して十月八日にテレビで全国放映されました。これは映画「わが母の記」との連動企画でもありません。また、「猟銃」がカナダ人のセルジュ・ラモット翻案、同じくカナダ人フランスワ・ジラルド演出、中谷美紀、ロドリグ・プロトー出演で、十月の渋谷パルコ劇場を皮切りに各地を回ります。さらに、一昨年中国で、田壮壮監督、オダギリジョー、マギー・Q氏らの出演で映画化された短編「狼災記」が、「ウォーリアー&ウルフ」として日本に逆輸入され、十月から渋谷のシネマライズをはじめ、全国で上映されます。

自分の作品の映画・演劇関係での突然の賑わいに、父も吃驚していることと思います。

平成二十三年十月吉日

モントリオールの北京ダック

原田真人（映画監督）

第三十五回モントリオール世界映画祭での「わが母の記」受賞の報せは京都東福寺国宝龍吟庵りょうごんあんの方丈で受け取った。携帯電話に入ったメールは一言、「審査員特別賞ゲット!」。送り手は編集を担当した息子の遊人ゆうじんである。正式な賞の呼称は審査員特別グランプリ。

カナダのケベック州にあるモントリオールの映画祭では受賞ランクがはつきりしていて、最高賞の「アメリカ・グランプリ」を金メダルとするならば、「審査員特別グランプリ」が銀メダル、「監督賞」が銅メダルに置き換えられる。これらの賞はすべて監督に与えられる。フランス語圏のケベックでは、映画の著作者者しやくしやくに関してもフランス国内並みに「著作権は監督にある」という考えが徹底している。ちなみに、それ以外

の賞、主演男女優・脚本の各賞も銅メダルの感覚だ。ところが、映画祭によつては「審査員特別賞」というのは文字通り、審査員の特別な配慮で与えられる「残念賞」という場合もあるから、受賞第一報へのほくの反応はひどく鈍かった。

正直に言つて、現地入りしている樹木希林ききりんさんへの主演女優賞ではなかったのか、という落胆もあった。だから、方丈の縁側で本番のセットアップを待つ役所広司さんにも、極めて静かに「審査員特別賞でした」と伝えるにとどめた。

これが二〇一一年九月二十九日の朝。中部日本放送（CBC）開局六十周年記念TVスペシャル「初秋」の撮影に入って八日目のことである。

「初秋」の原作は井上靖先生の短編「凍れる樹」。簡

単に言えば、早くに妻を亡くしたワイナリー経営者の男がひとり娘の結婚という事態に動転し、結婚式の夜東京へ行く。そこで出会った、娘と同年代のホステス・れい子との一夜の、あいまいな疑似恋愛を描いている。導入部は小津安二郎監督の遺作となった「秋刀魚の味」のエンディングの空気感と酷似している。

企画の端緒となったのは「わが母の記」である。井上文学に小津安二郎の映画のタッチを掛け合わせたこの作品を撮影しているところから、「わが母の記」の主役である役所広司さんと組んで、同方向のTVドラマを作ってくれないか、という要請が製作の松竹からあった。そのとき担当プロデューサーが持って来たのが「凍れる樹」である。原作にはほ忠実なプロットも用意されていた。

一読して、このプロットでは作れない、と却下した。半世紀以上前に書かれた短編をそのまま現代に移し替えても無理がある。

しかし、小津作品とクロスする井上文学の味わいは捨てがたい。

より小津映画を感じさせる展開はできないのかと葛藤し、全面的にプロットを書き換え提出すると、これが通ってしまった。通常のTVスペシャルでは無理かと思われる要素を多々含んでいたの、ほくにはかなり意外なことでもあった。

要は、父と娘の関係に小津の「晩春」（一九四九年）を引用しつつ、もし、あの名作の原節子と笠智衆りゅうしゅの交情を一步踏み込んだ男と女の匂いで描くとどうなるだろう、という展開である。

主人公・松原の設定はほぼ原作通りだが、ヒロインを全面的に書き換えた。舞台も京都に移し、古い器に新しい命を注ぐことを「天命」と感じている娘にした。そして、カラーになってからの小津映画を彩った、ちよいワルオヤジ三銃士を主人公にからめて登場させ、彼らをすべて「ひとり娘の父親」にした。

既に花嫁の父となった作家・重宗、本日は花嫁の父になったばかりのワイナリー経営者・松原、花嫁の父に

なりたいた願いつつ娘との関係が悪化してしまった山辺、である。しかも、ヒロイン・れい子が山辺の娘であったならどうであろう、という「劇的な化学反応式」も加えた。

原作における松原と山辺の関係を生かしつつ、原作における一瞬の脇役「重宗」を細胞分裂させ、重宗Aを松原と山辺の同級生にして、重宗Bを「赤石の話をする恩師」、つまり、「秋刀魚の味」で言えば東野英治郎演ずるオヤジ三銃士の恩師「ひょうたん」の役どころとした。

こういった脚色のすべては井上靖先生と小津安二郎監督へのオマージュであると考えていただきたい。

受賞の報の前日、ぼくはかつて色街であった上七軒かみちちにある高級な待合い風バーで、主人公・松原辰平（役所広司）とれい子（中越典子）が出会うシーンを撮っていた。十三時間時差のあるモントリオールでは、この日に「わが母の記」のワールド・プレミアが行われていた。

樹木さんは文字通り宙を飛んでいる。

元々、モントリオールへの出品が決まった時点で、松竹はデリゲーション（代表団）を送ることを考えていなかった。主演の役所さんと監督のぼくが「初秋」に取りかかっており、宮崎あおいちゃんも新作撮影中、樹木さんは休暇中ということで、松竹は業務担当をひとり送ればいいという考え方だったようだ。

それで、ぼくは個人的に監督代理として遊人を送ることを決め、丁度ロサンゼルスロスの我が家の管理のためアメリカにいた、妻であり株式会社スカイホークの代表取締役である福田みずほが、モントリオールで遊人と合流することになった。家族の絆を描く映画である以上、家族に代理を務めてもらうことは当然の選択でもあった。「初秋」でも編集兼出演を務める遊人にとってはハードな日程となるが、そこは若さで補えると考えた。

格安チケットだったので、遊人は京都のロケ地から東京へ戻り、自分の荷物をピックアップして終電で羽田に向かい、そこで一晩過ごし早朝のデトロイト経

現地時間九月二十七日には、十一時二十分からのプレス試写、十五時からの記者会見、二十一時半からの正式上映というプログラムが組まれており、「わが母の記」はコンペ二十作品の最後に上映されることになっていた。さらに、授賞式の前夜には、何を受賞したのかは言わないものの、関係者に「明日の式には是非出席してください」という暗示のような「内定通知」があるということだったから、現地での上映の反応やら内定やらをドキドキ待ちながら、ぼくは撮影に臨んでいた。

昼過ぎから、情報が続々入り始めた。プレス試写は、一般客も含む八百席の会場が満席、レッドカーペットでの撮影会も記者会見も無事終了といった第一報とともに、現地の様子を捕えた写真メールも入って来た。樹木さんと遊人がレッドカーペットを「疾走する」写真もあった。

後で遊人から聞いたところでは、このとき、樹木さんの方から「遊人君、走ろうか？」と言って、駆け出したそうである。ネットでも人気を呼んだこの一枚、

由の便でモントリオールに向かった。到着したときはくたくたに疲れ、ひどく心細かったに違いない。なにしろ彼としては生まれて初めて父親の代理として、舞台挨拶も記者会見もひとりでごなさねばならないのだから。

こういう事情を知って、樹木希林さんはスイスの寄宿制の学校に通う孫の雅楽くんとのヴァケーション予定を変更し、やはり自費で映画祭に参加してくれることになった。

舞台挨拶でも、会見でも、樹木さんの当意即妙な受け答えは聴衆の笑いを誘い、さらには作品の本質を語り、「わが母の記」の顔として映画祭を盛り上げてくれたようだ。結果として、記者会見もコンペ作品の中ではダントツの入りとなり、授賞式直前に行われた三度目の上映でも、八百席の客席が満席になったという。しかも、この日は大型のハリケーン・アイリーンが北米大陸の東部に上陸し、モントリオールでも相当な被害が出ていた。

樹木さんと遊人は徒歩五分の会場に強風のため歩い

て行くことができず、車は大渋滞、舞台挨拶に遅れた。会場へ着いたときには既に司会者が舞台袖に引つ込み、上映が始まるうとしていた。そのとき樹木さんは迷うことなく遊人の手を引いて舞台上がり、息を切らせて満員の観客に挨拶をしたのだという。

素晴らしき「わが母の記」の「母」の姿である。

ハリケーンをものともせず会場にやって来た満席の観客は上映前も、そして、上映後も、日本からのゲストに大きな喝采を送ってくれたとのことだ。

上七軒の撮影合間に、最初の「内定通知」を伝えてくれたのは役所さんである。次の本番のカメラフレームを確認しているところへやって来て、ごくごくソフトに「授賞式に参加するよう言われたようです」と口にした。役所さんにはっこり笑い、ほくも安堵の笑みを浮かべた。

現地入りしている松竹関係者から役所さんの事務所へ連絡が入り、事務所から役所さんのもとに届いた知らせだった。十分後に、撮影現場にいた松竹スタッフ

から続報が入った。「授賞式には出てくれと言われたが受賞したのかどうかは不明」というのだ。現地の混乱を伝える情報が飛び交い、ぼくたちはやきもきしながら撮影を続けた。

上七軒のロケ現場にいた「わが母の記」組は、役所さんとぼくと助監督、録音、衣装の五人だが、京都のスタッフとのチームワークは最高で、原田組としてまとまっていたので一喜一憂も全員が共有していた。

結果を先に言うならば、「内定通知」は確かにあった。「授賞式に参加してください」と言われた松竹関係者が、とても積極的な性格の持ち主だったので、「なんの賞を受賞したんですか？」と、映画祭委員長のセルジュ・ロジークに尋ねたらしい。ロジークは「受賞したかどうかわかるわけではない。アカデミー賞と同じなんだから。授賞式に参加するのは当たり前のことだろう」といささか怒気を含んだ口調で答え、これに驚いた松竹関係者は「受賞したかどうかはわからない」というメールを打ったのだ。

翌日の授賞式に参加した樹木さんと遊人も、まった

く状況がわからないまま式の進行を見守っていた。一番最初に、やはり、松竹が出品していた「アントキノイノチ」の監督がイノヴェーション賞を受賞した以外、どんな賞をだれが取ったのかもわからなかった。式はフランス語だけで進化したのだ。

主演女優賞はイランの女優が受賞し、既に帰国した彼女が変わってモントリオール在住のイラン人がステージに上がった。彼は受賞の喜びを英語で語り、電話で受賞を知った本人も喜んでいる、と彼女のメッセージを読み上げた。

これで、遊人は「なんだ、受賞者は前もって知らされていたんだ」と思い、そう樹木さんにも伝えた。樹木さんは「授賞式が終わったら北京ダックを食べに行きましよう」と答えた。

これは、遊人が樹木さんから聞いたという杉村春子さんの話と奇妙にシンクロする。

樹木さんは十代のころ文学座に入団し、そこで大女優・杉村春子に面白いがっつもらった。杉村春子と言えば、ぼくにとっては小津作品を代表する名女優で

ある。一九四九年の「晩春」で小津デビューを果たし、以降、小津監督の遺作となった「秋刀魚の味」（一九六二年）まで九本の作品で、当時日本でもっともナチュラルな名演を残している。小津監督も、杉村さんに関してはかなり自由にやらせたようだ。

樹木さんが初めて訪問した撮影現場は「秋刀魚の味」だった。杉村春子さんの付き人だった。そこで目撃した小津安二郎の演出は、ただ一言。「もう一回」である。杉村さんは、小津さんの「もう一回」という声に、同じ芝居を二十テイクほど繰り返し返したのだという。若い樹木さんには何がどう違うのかまったく理解できなかった。映画の現場とはなんと退屈なものだろうと思ったという。

やっど監督のOKが出ると、杉村さんは樹木さんのところに満面の笑顔で戻って来て開口一番「こう言った。」「さあ、なにを食べに行こうかしら」。

失意や絶望や怒りとすりかわる食欲は芸術家の特権である。

そうやって、北京ダックをどこで食べようかという

話をしているころ、いよいよ残されたふたつの大賞の発表になった。フランス語による発表の中に、遊人は“Chronicle of My Mother”という英語を聞いたように思った。「樹木さん、ひょっとしたら何かの賞を取ったのかもしれないよ」と遊人が伝えると、彼女はほかに顔をした。映画祭関係者がふたりのところに殺到してステージへ導いた。そこでは審査委員長のヴィセンテ・アラランダ監督がトロフィーを持って待っていた。今度はスペイン語でスピーチが始まった。どんな賞を受け取ったのかわからないまま舞台袖に引込み、そこで状況が呑み込めた。

龍吟庵の方丈でぼくが受け取ったメールは一言、「審査員特別賞ゲット!」。正式な賞の呼称は審査員特別グランプリ。

十五分後、遊人から電話が入り、樹木さんとも話すことができた。

「グランプリじゃないからなんて文句言っちゃだめですよ、監督。とつても大きな賞なんだから。遊人君

だって、舞台でふるえていたんだから」。

この電話のあと、樹木さんは遊人や関係者を引き連れて北京ダックを食べに行ったそうである。

肖像権の関係により、ホームページ版では、
本写真を掲載できません。

「わが母の記」出演者と撮影スタッフの集合写真（2011年2月23日、ロケセットとなった井上邸の応接間にて）。前列中央でヘッドフォンを首にかけているのが筆者。

『北の海』と高専柔道の魅力

菊地勝義（伊豆市教育委員会指導主事）

はじめに

「洪作は貧弱な体を持ちながらも、とことん強い蓮実に魅了され、練習量がすべてを決定する柔道」の存在を知る。今まで極楽とんぼと呼ばれ、自由気儘に生きてきた生活とは対照的な四高柔道部の生活を送ることを決心する。これは、長い人生における通過点のひとつにしかすぎない。だが、努力したこともなければ自分を律したこともない、と語る洪作にとっては、とても大きな決断だったのではないだろうか。洪作にどれほどの衝撃を与えたかは、計り知れないものがある。なぜなら、洪作が生まれてはじめて持つ志だったからだ。」

この文章は、昨年度井上靖作品読書感想文コンク

『北の海』と高専柔道

小説『北の海』は、井上靖の自伝的三部作の第三作とされている。中学を卒業して沼津で浪人生活を送り、あまり受験勉強もせずに毎日母校の柔道場へ通っているうちに、金沢四校の柔道部員・蓮実の勧誘で金沢に出向き、練習量がすべてを決定する柔道[〃]がいかなるものかを体験して帰る、ほぼ半年間の様子が描かれている。柔道に情熱の全てを注ぎ込んだ若き日の生活ぶりは、多感な青春時代にもかかわらず、学問とも異性とも無縁な、まさに、明けても暮れても柔道のみ[〃]という内容であった。

ところで、当時の四校柔道の形態は、鮮やかな投げ技を主体とする講道館柔道のスタイルとは全く異なり、寝技を中心とするものであった。その実態は、試合においても稽古においても、最初と最後こそ立礼を行うが、開始早々直ちに両者とも寝姿勢になり、仰向けになつたり覆いかぶさつたりしながら攻防を続け、「抑込^{こみむ}技」や「絞^{しめむ}技」、「関^{かん}節^{せつ}技」等でポイントを取るといふ、とても、地味[〃]で、汗臭いイメージのものであ

ル中学生最優秀賞受賞作品（「仲間と強い志」筑波大学附属中学校三年・皆川宥子）の一部である。

伊豆市教育委員会において当コンクールの担当をしてきた筆者にとつて、例年多くの学生が『北の海』を題材に当コンクールに応募され、しかもほぼ毎年最優秀作品が出てきていることに、大きな喜びと感謝の念を抱かずにはいられない。なぜなら、筆者もかつて学生時代に柔道を経験し、郷土の大先輩の自伝『北の海』から、苦しい柔道の稽古に打ち勝つ勇氣や励ましをいただいた一人だからである。第一線を退き、わずかに地元スポーツ少年団のコーチとして携わっている現在でも、折に触れ書棚にある本書をひもときながら、後輩たちへの指導の参考とさせていただいている。

る。

こういつた寝技を中心とする独特な柔道の形態は、一八九八年（明治三十一）旧制第一高等学校と第二高等学校との間で行われた対抗戦に端を発し、旧制高等学校、大学予科、旧制専門学校等が参加して行われた柔道大会において、「高専柔道」として大成されてきた。井上靖が在籍した金沢四高は、高専柔道大会においても第一回から七回大会まで七連覇を成したほどの強豪で、大会制覇を目標にひたむきに稽古に打ち込んだ井上靖は、豪傑揃いの四高柔道部の中でも中心選手として活躍した。

戦後、学制改革により旧制高校は消滅したものの、高専柔道は、OBたちがそのルールを引き継ぎ七帝国大学柔道大会（通称「七帝戦」）として、現在まで百年以上の伝統と高度な技術が継承されてきている。また、高専柔道界からは、文豪・井上靖以外にも、永野重雄（元新日本製鉄会長）、正力松太郎（元衆議院議員、読売巨人軍創立者）、松前重義（元衆議院議員、東海大学創立者）など、政財界に多くの人材が輩出されている。



名古屋大学・静岡大学柔道部員集合写真（1985年度夏合宿にて）。前列中央が小坂光之介師範、前列右端が筆者。

大天井（小坂光之介）と洪作（井上靖）

筆者は、かつて洪作が修行したのと同時期、すなわち高校・大学時代に柔道を経験することができたが、その質や内容は、洪作のそれには到底及ばない低いレベルのものであったことは間違いない。その形態は、現在主流となっている立技中心の講道館柔道であって、試合においても稽古においても寝技の攻防に費やす時間は、立ち技に比べて圧倒的に少なかった。実際、各種大会において、相手を投げて勝った思い出や、投げられて負けた思い出は数多くあるが、寝技による勝敗の決着は比較的少なかったように記憶している。

しかしながら、たった一度だけ、偶然にも高専柔道の世界を体験する機会を得ることがあった。それは、筆者が大学三年時（一九八五年）の夏合宿で名古屋大学に遠征した際、名大師範・小坂光之介氏より数多くの奥義とも言うべき寝技を指導されたからである。その小坂氏は、二十五歳の若さで金沢四高柔道部教師となり、その後、旧制中学や高校、新制大学などで指導を続け、一九六七年より名古屋大学の師範の座に就か

れており、まさに高専柔道界の第一人者であった。

筆者は、当時八十歳近い師範に「上四方固め」で押え込まれ、「逃げてみなさい」と言われて必死に暴れたものの、氏の巧みな体重移動と局所的な力の緩急により、最後まで逃がしてもらえなかったことを覚えている。また、その他にも、講道館柔道にはない特別な抑込技や関節技の掛け方・逃げ方などを実践を交えて丁寧な指導してくださり、その貴重な記録を記した筆者の『柔道ノート』は、現在も我が家の書棚に大切に保管してある。

ところでこの小坂師範が、実は『北の海』に登場する「大天井」本人であり、実際に四高の柔道場において洪作とも苦楽を共にした仲間であったことがわかった。しかもそれを知ったのは、合宿の最終日の交歓会の場で、筆者が小坂師範と直接懇談していたときで、大変感激したことを覚えている。

その時の小坂氏との会話で最も印象に残っているのは、柔道仲間であった「鶴（小説では鷹）」や「井上」とのエピソードである。ある日下宿先で出された食

事のご飯（一升）を三人だけで完食しようと頑張ったのだという。「絶対に平らげてしまおう！」と意気込んで食べ始めたが、「食べても食べてもなかなか完食できず、最後には喉の奥にご飯を無理やり押し込むようにして平らげたよ！」「その後しばらくは、三人とも腹が苦しくて動けなかったよ！」という内容の話であった。小説には記載されていないほのぼのとしたエピソードであったが、半世紀もの昔の出来事を昨日のことのように熱く語ってくださった小坂師範の表情を、筆者は今でも忘れることができない。

おわりに

一昨年（二〇〇九年）一月に「国際柔道試合審判規定」の一部が改正され、試合中における寝技の攻防がそれ以前より重要視されるようになった。以前であれば直ちに「待て」の合図がかかり、立ち姿勢にて試合が再開されていた場面であっても、しばらくの間寝技の攻防を継続させるように変更されたのである。

今回の改正は、それまでの規定において、日本古来

の柔道の重要な要素である「寝技」があまりにも軽視されてきたことを危惧する立場から、実現されたものと思われる。このことは、高専柔道を地道に継承・発展させてきた井上氏や小坂氏など、多くの関係者にとって朗報であることは間違いないであろう。両氏とも故人となられた今、その朗報を伝える術もないが、「寝技軽視への警鐘」ともいえる今次の規定改正は、後進を指導する柔道関係者への今後の教訓であることは言うまでもない。

筆者も柔道指導者の一人として、これからは寝技・立技わけ隔てなく使えるバランスのよい柔道選手を育成できるよう、いっそうの研修・精進を重ねていきたい。また、寝技の真髄をとことんまで追求して大成された高専柔道の魅力についても、後輩たちに確実に伝えていきたいと思っている。



◎井上靖記念館（旭川市）行事予定

【企画展】

○「井上靖 西域小説」展
 （二〇二一年十月二十九日～二〇二二年二月五日）
 万里の長城のはるか西方に広がる「西域」の地。その「西域」を舞台に展開する「敦煌」「楼蘭」など、井上靖の「謎と冒険」に満ちた世界を探ります。

○「井上靖 人と文学」展
 （二〇二二年二月十一日～五月）
 井上靖邸の書斎・心接間の移転を記念して、井上靖の人と文学を紹介します。
 ※この企画展に関連して「井上靖講座」（二〇二二年二月二十五日）を行います（内容は企画展の解説、文学入門）。

【読書会】

○「井上靖 短編小説を読む」
 第五回「どうぞお先きにー」「くもの巣」（二〇二二年一月二十八日）
 第六回「僧行賀の涙」（二〇二二年三月十日）

○赤い実の洋燈読書会（毎週土曜日）
 「赤い実のランプふあんクラブ」と共催の読書会を行っています。

【講座】

「歴史と和歌と小説と——『額田女王』をめぐる」
 （二〇二二年一月二十二日）
 講師：伊藤一男（北海道教育大学教授）



戦地での創作メモ

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、新潮社版『井上靖全集』の編者、曾根博義氏に監修をお願いして、順次紹介していくものである。

連載三回目の今回は、井上靖が日中戦争初期に輜重兵特務兵として従軍した際に携帯していた手帳の翻刻である。『新潮』二〇〇九年十二月号に掲載された「中国行軍日記」の手帳などと一緒に保管されていたものだが、本資料は日々の記録ではなく、戦地で見聞きしたエピソードや創作のためのメモ、作家として世に出るための計画、家族に対する思いや人生の煩悶などが綴られている。井上靖のその後の創作活動を考える上で大変興味深い資料である。

〔一〕

弾丸に当たった時は何か丸太か何かでピシリとぶたれた感じ。瀧口君も迫撃砲の破片を十何片も浴びたが、その時は煉瓦の破片でもかぶった様な気だつたとのこと。只脊中一面に次第に冷たさを覚えて傍の兵隊に見て貰ふと、血でぬれてゐるといふ。次いで服の下をさぐつて貰ふと、穴が方々にあいてる。と言はれ、初めてやられたと知つてぞつとしたとのこと。血潮でビツシヨリのシャツを頭から脱げないので、ナイフで割いて取つた由。

弾丸の悪戯

- 水筒に当つて、内部でクル／＼と廻りそのまゝ止まつたもの
- 第七肋骨に当つて、骨を折つて再び飛び出した奴あり、骨の廻りをぐるりと一廻転したものならん（娘子関の敵襲の折、幸村部隊の西川軍曹）
- 肩章と洋服の間をうまく抜けて行つた奴あり

※

病院の患者は全部運命論者だ。「凱コロ」——凱旋するとコロリと参る意。龍コロ（龍山の意）等の不吉の言葉を互に投げ合つて、それで平気だ。

※

野々村君の話——娘子関で夜逃げ出す時月が出て、月の光で鉄カブトが反射して困ったあげく、到頭、鉄かぶとを脱いだとのこと。実際逃げる時は鉄かぶとの光りさへ、敵に見出されそうで怖いのだらう。

※

兵隊が弾丸に当たった時、倒れながら号ぶ言葉は「やられた」といふのが一番多いそうだ。全く「やられた」といふ言葉が一番率直で含蓄ふかし。

(改ページ)

爆弾が飛行機より落ちてくると、みんな上を見ながら逃げるんだが、どういふわけか、爆弾のおちる方へ逃げて戦死する人が多いといふ。

※

爆撃でやられた人はやはり飛行機の爆音は怖ろしいものらしい。病院にゐても「また来やあがつた」とベットから起上る。

※

敵を夜襲するとき、戦友が弾丸に当りうなつても、「シーツ」と制して地を這つてゆくといふ。傷ついている兵隊は声を立てまいと土にかぶりついて死んでしまふのだと。後から進む兵隊は戦友の屍をよけて這うのが実に面倒の由、それを越えれば弾丸に当たるといふ。

(改ページ)

十月十日 滹沱川戦闘開始

十二日晚

十三日払暁

元氏の戦闘

元氏の城内 中央軍の一部

水戸歩兵 二聯隊

宇都宮 五十九聯隊

娘子関へは五ノ井部隊 鯉渡部隊。

生活のために読物を書こうか、あくまで自分の気持ちの満足するような芸術小説を書こうか、この二つのうちのどちらかを選ぼうとするから、窮屈になるのであらう。先ず一つを選択して、それに邁進するといふ事は、云ふまでもなく最も賢明であるかも知れないが、これは自分に当てはめるのは少々不自然な気がする。脚本にも読物にも創作にも、それらのうちを貫く特殊な一本の糸を自分は自分のうちに持つてゐる。自惚れでなく斯ういへるであらう。これが僕の長所でもあれば短所でもある。

芝居も書こう。読物も書こう。創作も発表しよう——そして、いつか自分の進む一本の路が、分明になつてくる時があるであらう。

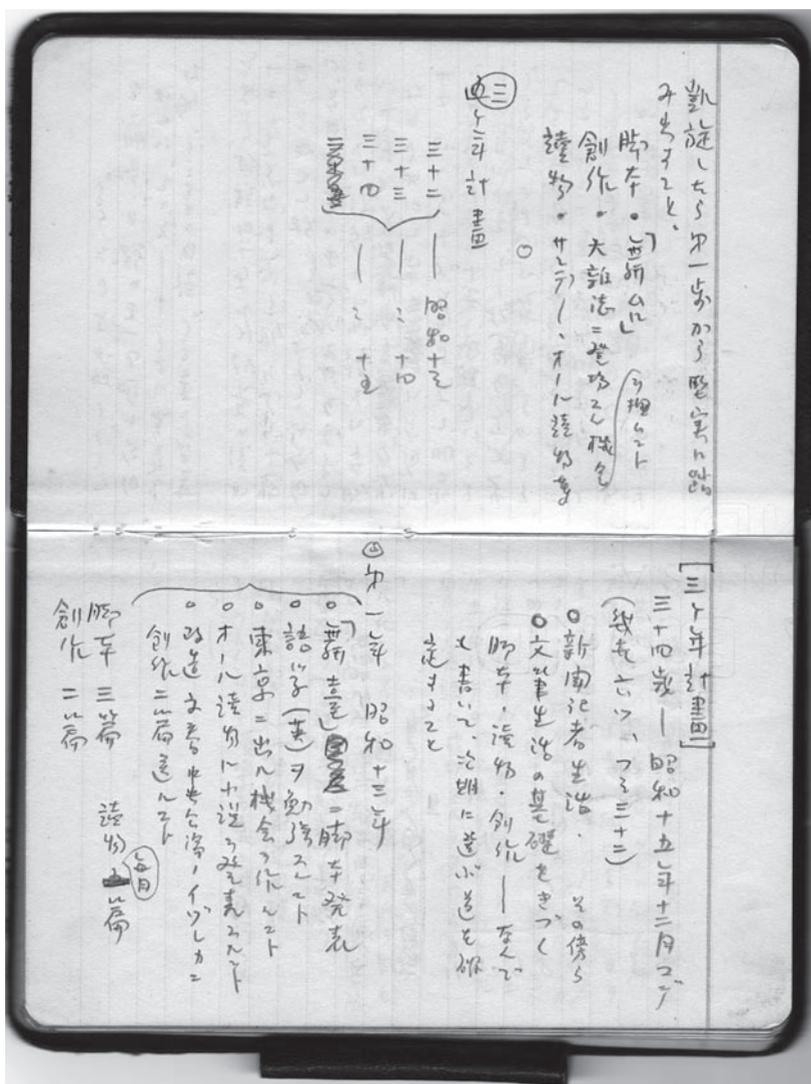
凱旋したら第一歩から堅実に踏み出すこと。

脚本・「舞台」

創作・大雑誌に登場する機会を掴むこと

読物・サンデー・オール読物等

三ヶ年計画



以後の創作活動をみすえた「三ヶ年計画」

三十二 — 昭和十三
 三十三 — 〃 十四
 三十四 — 〃 十五

(改ページ)

〔三ヶ年計画〕

三十四歳——昭和十五年十二月まで(幾世六ツ、フミ三十二)

○新聞記者生活、その傍ら

○文筆生活の基礎をきづく

脚本・読物・創作——なんでも書いて、次期に選ぶ道を確認すること

◎第一年 昭和十三年

○「舞台」に脚本発表

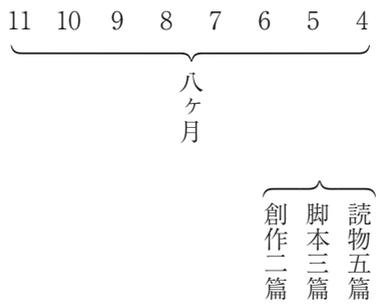
○語学(英)を勉強すること

○東京に出る機会を作ること

○オール読物に小説を発表すること

○改造文春中央公論のいづれかに創作二篇送ること

脚本三篇 読物毎月一篇 創作二篇



入隊してゐる間 二月・三月・四月

脚本(羊カン・桜散る)二篇

読物(人形芝居)

創作 テーマ 構想

(改ページ)

女の問題が解決できないでゐる男が、あらゆる苦悩にさいなまれた果、それを慰藉料で清算しようとする。彼は多額の金を、金にかへがたき女の代償としてある男よりとつた。二千五百円！ それが生命にかへがたい女の値段なのだ。過去の楽しい二人の総ての記憶が二千五百円だ。しかしその二千五百円で女の記憶を拭ひさらうとする男の実験は成功するであろうか。

○

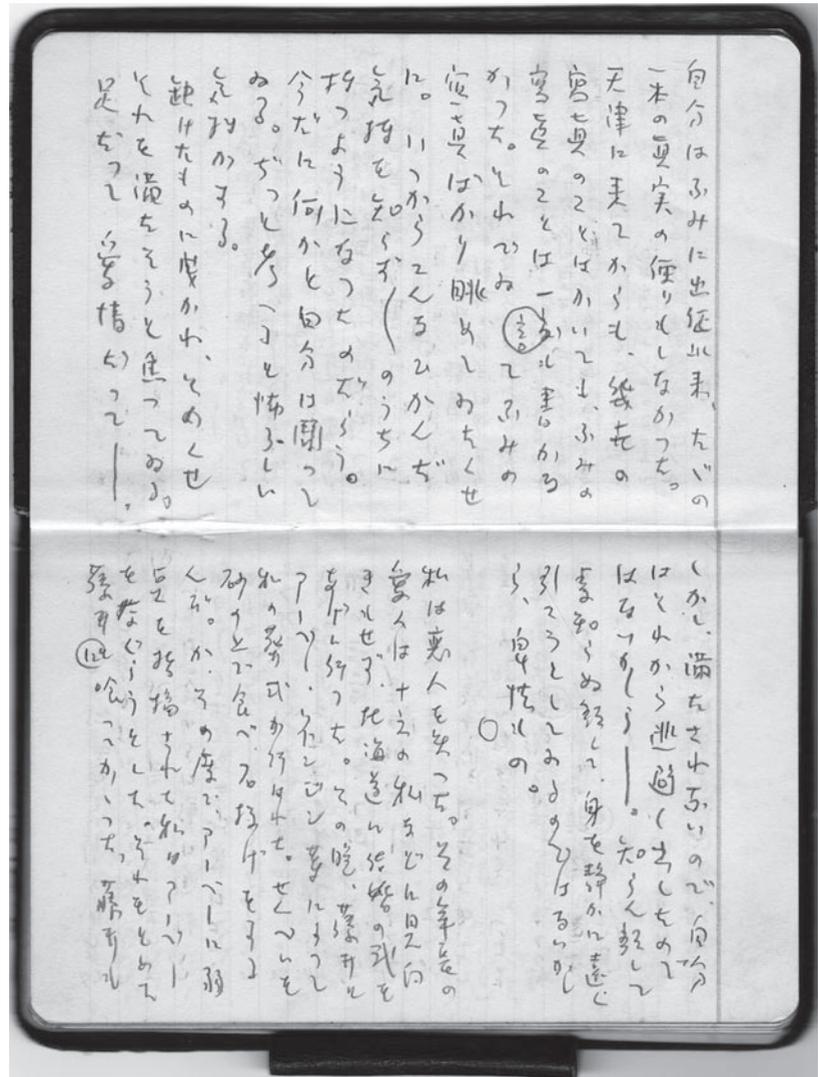
「元氏」といふ題の小説。元氏で駐屯する部隊のある班の生活と数人の兵隊の生活を書いたら面白だらう。

○

桜ひらく——少年時代をかき、その少年を順次成長させて行つたら——。

(改ページ)

自分はふみに出征以来、たゞの一本の真実の便りもしなかつた。天津に来てからも、幾世の写真のことはかいても、ふみの写真のことは一言も書かなかつた。それでゐてふみの写真ばかり眺めてゐた。いつからこんなひがんだ気持を知らず／＼のうちに持つようになったのだらう。今だに何か



妻ふみに対する想いと沼津中学時代の恋愛について

と自分は闘つてゐる。ぢつと考へると怖ろしい気持がする。

欠けたものに曳かれ、そのくせそれを満たそうと焦つてゐる。足だつて、愛情だつて——。しかし、満たされないで、自分はそれから逃避し出したのではないかしら——。知らん顔して素知らぬ顔して、身を静かに遠く引こうとしてゐるのではないかしら、卑怯もの。

○

私は恋人を失つた。その年長の愛人は十六の私などに見向きもせず、北海道に結婚の式をあげに行つた。その晩、藤井とアーベ、ネンジン等によつて私の葬式が行はれた。せんべいを砂の上で食べ、石投げをするんだ。が、その席で、アーベに弱点を指摘された私はアーベをなぐらうとした。それをとめた藤井にも喰つてかゝつた。藤井も失礼してゐた。二人は互に殴りあつた。

× ×

「謹んで、御申告申し上げます」、また暫くすると「謹んで、御申告申し上げます」、うわ言の様に一晚中、どなつてゐた兵隊もその翌日、暁方死んだ。「子供、お父さんの顔は見えるか——真剣な声だつた。何回も何回も、そして高熱の瞳が弾痕のある天井を見詰めてゐる。その兵隊は怖らく死んだのであらう。——兵隊たちの言葉は支那海をひょう／＼と渡つて故国に伝はらぬ筈はない。あの声、そして又あの声。死者の故国の家に何か変つたことがあると聞いてゐる。何の不思議もないような気がするのだ。私はたしかにみた、兵隊が内地の家のドアをたゞくのを。何の不思議もないのである。

× × ×

石家荘

白く冷たい石家荘。石門中学跡の野戦予備病院。上着を着てふくらんでゐた小島君、能登の漁師といふ後備の四十近いオツサン、それから一高の国分君、伊勢の漆器屋の若。みんな懐しい人等。初めて蒲団を着て寝て勿体ないと思つたつけ。わざ／＼薄着をして再び戦線に立つた時の要心をしたのも、たまらなくなつかしい緊張だ。羊羹をたべた、何本でも食べたかつた、酒保の前の焚火にあたり乍ら、カステラを買ひ、栗マンジウを買つた。酒保のオツサンに気兼ねする程買ひに走つた。

(改ページ)

光に濡れて白々と打伏す屍。わが友よ、君は護国の花と散り、吾は銃火にまだ死なず——小島君から教つた歌。それを唄ひ乍ら、裏門から広場のある道を歩いた。出征中、感傷的になつたのはこの病院にゐる時だけだつた。ポブラが寒空に枝を伸ばし、歩哨が銃をかゝへて所在なげに歩いてゐる。何故、あんなに感傷にぬれたのか。暗いながらも電燈が一ヶあつた。飯がモク／＼食べれた。狂人の歩兵が戸外で寒い中に突立つて頬を真赤にして大きい井をかゝへてゐた。それからプロペラ伍長のひげ。その頃、部隊は雪の中を順徳に向つてゐた。あゝ、石家荘。小島君と脱走して街に出た思出——、ぜんざいを食べ、うどんを食べ、羊羹を買つた。戸山学校の軍楽隊の演奏、広場で聞いたあの興奮。石家荘の記憶だけがこんどの出征の思出の中で、一ヶ所ぽつんと濡れてゐる。何故だろー。

顔がむくんで、すびて、又むくんだ。みんな胸に沁みる記憶ばかりだ。内地ではどんな田舎でも見

られないよーな、あやし気な京都の写真がたまらなく嬉しく、北支戦線の画面に出ると目頭が熱くなつた。それをみてゐるのはみんな負傷者等だつた。その幾人かが死に、幾人かが今内地にゐるだらう。光にぬれて白々と——この頃の感傷がそのまゝ石家荘の印象だ。

× × ×

人生亦憂患多し。何でもなく聞いてゐた言葉が昨今切々と胸を打つ。半生を顧みれば、憂患に負つて踳踘とさまよはざる年月はなし。幼少の頃、小学校で弄められ、悲しいニンゲンの道に始まり、その後は少年時代から二十五六までに日夜煩悶。そして結婚生活に入つて、これは墓場までつゞく苦惱だらう。苦惱を持たなければ生きてゆけない様に運命づけられてゐるのだらう。逃げることは出来な
いなら、じつと耐えて、それを克服する以外テはあるまい。父は斯うした苦しみを持つただらうか、そして母は——。赤い舌をべろりと出して、地べたの上に胡座をかけ井上靖！

× × ×

弾丸に腕をやられた時、彼（鈴木四郎君）は助かつた、あゝこれで生命に別条はない、後方に退けると思つたとのこと。この気持は負傷者のだれでもが感ずるところだという。それから他人の負傷をみたときは、「野郎、うまくやりあがつた」と思ふと言ふ。弾丸に当るのが怖いのではない。うまく当りたいのだ。

× × ×

傍で親友がばつたり戦死したとき、「あゝ次は俺の番だ」——思はず、瞬間こう思うそーだ。どん

な仲のよい戦友でも可哀想だと思ふ前に、直ぐ自分の運命が儼にかぶのである。

（改ページ）

兵隊が練兵場で演習してゐるのを見て、誰が兵隊の気持を考へるだらう。勇ましく規律的で美しいそーした一枚の風景としか何人の眼にも映らないだらう。召使人でも往来でみる労働者でも同じことだ。人間は誰でも形だけみることはいけないだらう。

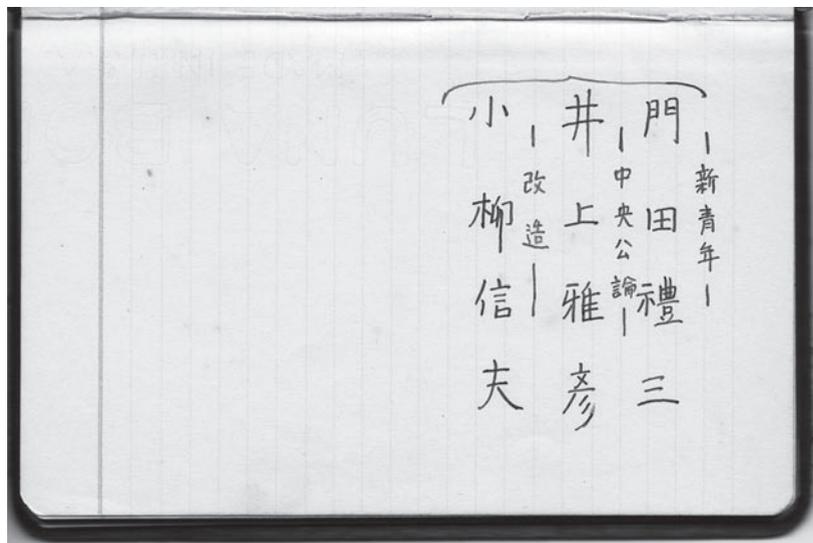
桜の花は散るときより咲くときの方が却つて悲しくはないだらうか——花の気持も考へてやる人間になり度いものだ。花の無心の気持も。

（改ページ）

十七才の少年。母の家の神聖な夢——自分の世だけは、自分の家系だけはいふ考へが打くだかれ
る。同様に淡い初恋が破れる。年上の女は彼なぞにとん着なく北海道へ嫁いでゆく。人生に於いて初
めて巡つてきた少年の孤独。一高志願。勉強の予定表。最後に決闘。アーベール、ネンヂン。

沼津時代。

—新青年—
 門田禮三
 —中央公論—
 井上雅彦
 —改造—
 小柳信夫



雑誌投稿の筆名の候補

解説

曾根博義

入隊二か月半後の昭和十二年十一月十九日、元氏に初雪が降った日、井上靖の属する新野部隊に対して順徳への出発命令が下った。井上靖は軍医から脚気のため入院の必要ありとの診断を受け、部隊から離れて駅に向い、列車で石家荘に出、十一月二十日から十二月六日まで石家荘の野戦予備病院に入院。七日、さらに後送を命じられて、九日、天津の野戦予備病院に送られ、昭和十三年の正月を挟んで一月十四日まで一か月余り同病院で内地還送を待つことになる。

この手帳は、中ほどで妻ふみについて記した箇所、「天津に来てからも」とあることから、大部分がこの天津の病院に入院中に書かれたものと推定される。暮から新年にかけての天津の病院生活が、寒さは厳しくても、どんなに明るく、大きな安堵感をもって、のんびりと過ごされたかは「中国行軍日記」に詳しい。

病室はきれい、女性の看護婦がおり、白衣を着せられ、どこからかピアノの音が聞こえてくる。この最初の日の印象がすべてを語っている。

手帳は皮表紙に「memorandum」と金箔押し、縦一三・八センチ、横八・九センチ、「行軍日記」が記された大阪毎日新聞社員手帳とほぼ同じ大きさで、やや横幅が広い。メモは横罫の頁に縦書きで書かれている。全体は内容上、ほぼ四つのグループに分けられる。翻刻に当って、便宜上、原文にはない「一」「四」の番号を付して分けたが、これは必ずしも執筆の順序を示すものではない。手帳にはこれ以外に病院で知り合った兵士、その他の人のアドレス、銃の番号、汽車の時刻などの断片的メモも随処に記されているが、それらは省いた。

原文は漢字とひらがなで書かれた文章と、漢字とカタカナで書かれた文章が入り混じっているが、これらと同様外来語などのカタカナを除いて、原則として漢字・ひらがな表記に統一した。なるべく原文を重んじたが、漢字、かなづかいなどの明らかな誤りは、断

りなく正したものもある。

次にグループごとに内容を見ると、「一」は戦闘に関する他の兵士からの聞き書きが中心になっている。前線で戦ったことのない井上靖にとってはすべてがめずらしく、興味深かったに違いない、とくに小説を書くときに役立ちそうな話と思われるであろう。「一」の最後の元氏の戦闘などについての箇条書きは、自分たちの部隊が到着する前に元氏とその周辺であった交戦のメモである。

「二」は見るとおり自分の創作の種類、方向、具体的な計画などを記したものの。あらかじめ「読物」（大衆小説）と「創作」（芸術小説、純文学）のどちらか一つに決めるのでなく、両方を書いているうちに、自分の進む一本の道が見えてくるだろう、という自覚と自信が、「流転」執筆後間もないこの時期にすでにあったことには、驚かざるを得ない。とくにここでは脚本（芝居）が重視されていること、詩についてまったく触れていないことに注意すべきであろう。具体的な「三ヶ年計画」は微笑を誘うが、新聞記者生活の傍ら

文筆生活の基礎を築くという基本的方向はしっかりと見定められている。もともと、以後の実際の創作活動はこの通りには運ばず、すべて戦後に持ち越される。

「二」小説の構想など。「元氏」という小説はないが、詩はある（『北国』所収。「桜ひらく」の構想が戦後の小説「あすなる物語」などで実現されていることは周知の通り。「しろばんば」「夏草冬澗」「北の海」の長篇連作まで拵げて考えてもよいかもしれない。妻ふみに対する愛情や沼津中学時代の藤井壽雄らとの交友や恋愛も、人生上の悩みや自己省察や懐旧の念としてだけでなく、創作との関連で考えられるべきであろう。

「四」断片的メモだが、それぞれの雑誌に応募するための筆名の候補を書いたもの。『中央公論』『改造』などの総合雑誌が「大雑誌」と考えられていたことは、前節にも明らか。これ以前に「冬木荒之介」「澤木信乃」「京塚昌三」などの筆名を使っていることはすでに知られている。このあと、これらの雑誌や「二」にあげられていた雑誌に実際に投稿したかどうかは不明。いずれにしても、生と死を分かち白々とした石家荘

の印象が、天津の病院に移ってから感傷的に見えはじめ、死の危機を脱して生の回復に向う無聊と解放感の

なかで、もっぱら帰還後の創作のことを考えながら記された貴重なメモだといつてよからう。

◎井上靖文学館（長泉町）企画展

「井上靖の西域自写真」

（二〇一一年九月二十九日～十二月二十五日）

井上邸の移築に伴い、井上靖文学館では井上靖が遺した五百冊以上のアルバムのデジタル化に取り組んでいます。デジタル化プロジェクト第一弾として、井上靖本人が撮った西域の写真と詩・エッセイを紹介します。

【展示内容】

○作家の眼に、憧れていた西域はどのように映ったのか。トランク、カメラ、写真アルバムと直筆のノートは語ります。

○膨大な写真の中から、写真と「シルクロード詩集」を組み合わせることに挑戦しました。また、閲覧用のアルバムを自由に見られるようにご用意します。

◎映画「わが母の記」

移築前の井上邸をロケセットとして使用した映画「わが母の記」が、二〇一二年のゴールデンウィークから一般公開されます。

※第三十五回モントリオール世界映画祭審査員特別グランプリ受賞、第十六回釜山国際映画祭クロージング作品

原作・井上靖「わが母の記」

脚本・監督・原田真人

キャスト・役所広司（伊上洪作）／樹木希林（八重：洪作の母）／宮崎あおい（琴子：洪作の三女）／三國連太郎（隼人：洪作の父）／南果歩（桑子：洪作の妹）

／キムラ緑子（志賀子：洪作の妹）／ミムラ（郁子：洪作の長女）／菊池亜希子（紀子：洪作の次女）／真野恵里菜（貞世：女中、八重の面倒をみる）ほか

父と犬たちのこと

井上卓也
(井上靖・次男)

父の家では、いつも生き物を飼っていた。生き物と言っても変わったものではない。犬とか、猫とか小鳥の類。どこの家とも変わらない。高価な犬猫とは無縁。大抵もらい犬か、拾い猫。こう書くと父が動物好きだったように思われるかもしれないが、若い頃の父は、そうではなかった。

「好きも嫌いも無いよ、忙しくてそれどころじゃない」

父の本音はそんなところにあつたのではないか。本当に、作家になりたての頃の父は、眠る時間も無い忙しさだったようだ。しかしそんなことは分からない子供の私には、父が、犬や猫の頭をなでるなどということはおおよそ考えられなかった。それなのに、なぜ生き

物を飼ったかといえば、それは母が動物好きだったせい。それに、もちろん、四人の子供たちのことも気になっていただろう。自分は、ろくに子供たちの相手も出来ないから、せめて犬や猫ぐらい飼ってやろう……といった罪滅ぼしの気持ちもあったのではないか。

井上家は、昭和二十年代から、三十年代前半にかけて、品川区大井町の片隅にあつた。大井町の中で一度引越しをして、やがて、父がいわゆる大家への道を歩き始めると、世田谷の桜に移っていったのだが、そのすべての家に犬と猫はいた。大井町の初めの家には、父は、当時流行のスピッツで、やたらに吠えまくる神経質な犬であつた。猫はトラ縞のオス。ブクブク太つた大猫で、名前はタマ。このタマは、なんと、動物



父とエコ

には無関心だと思つていた父が、酔っ払つてご帰館の折に、拾つてきたものだと思つて母がだいたい後になって明かした。

大井町の家には、最初の家にも、引越した家にも狭いながら庭があつて、エルやロンと名付けられた犬が、鎖に繋がれていた姿を今でもはっきりと思ひ出す。父は、よほど機嫌の良い時でも、せいぜい犬に目をやるぐらいだった。

しかし、この犬たちに対する、つれない態度も、やがてゆっくりと変化していくことになる。それは私が、いくつかの雑誌に書いたように、若い頃は子供たちに無関心に見えた父が、年を重ねるに従つて、別人のごとく、遅れてやって来た子煩悩^①に変わつていったように。

先にも書いたように、父が有名作家になるにつれて手狭になつた大井町の家から、世田谷へ越すと、それまで飼つていたロンがジステンパーを患つて死に、それと代わるように、一匹の赤ん坊犬が、汽車に乗つて送られて来た。それが、我が家に今なお語り継がれて



エコ

いる、賢い犬・エコである。

父が、当時書いていた新聞小説「氷壁」がヒットして、取材中はもちろん、取材後も、父は、小説の舞台であった穂高に何回も登った。その穂高にある山小屋の、徳沢園で飼っていた、遭難者救援犬のエコの子供が送られてきたのであった。救援犬というと、何か立派な犬でも想像しがちだが、ただの普通の赤犬である。中学一年生だった私は従姉と、近くの駅まで、犬を受け取りに行ったのを憶えている。父が、犬のことを可愛いと思うようになったのは、このエコからだと思う。

父は、庭で、よくゴルフのパターやアプローチの練習をしていたが、そのボールを口に銜えて父に届けるのがエコの仕事だった。父は、「こいつは、頭がいいね。どこか違うよ」と言っていて、ご満悦だった。父は、仕事の合間に書齋に続いていた縁側で、よく椅子に座って一息入っていたが、そんな時、庭を走っている犬を観察していた。

そして、母に、

「見ていてごらん。エコの走る道筋は、いつも同じだ。寸分の狂いもない。あれは、犬だけに分かる。神様から命じられている何かだな」

などと、他人から見れば愚にもつかないことを言っていた。

父は、犬や猫や、その他の動物も、人間とは違う何か超自然な存在だと考えていたようなところがある。そんな考えが、こうした発言にも見られると思う。

エコの後も、何匹かのもらい犬や、拾い猫をしたが、父の死の数年前に、父にとっては、最後の飼い犬・チャコがもらわれて来た。この犬も、由緒も何もないイ

ヌッコロというに相応しい赤犬だった。

この犬がまだほんの子犬だった頃の話だ。私が妻と実家に立ち寄ると、すぐにチャコが寄ってきた。あまり可愛いので、私が母に、「ちょっと、今晚、チャコを借りていくよ」と言うと、母は、「一週間ぐらい持つていきなさい」と言った。すると、その話を聞きつけた父が、

「犬なんか借りていく奴がどこにいるか。ダメだ、ダメだ」



チャコ

と、えらく機嫌が悪い。父は、もうチャコが可愛くて、一晚も離せなかったのである。この話を父の墓前でしたら、きつと父は、ひどく照れくさそうな顔をして、「それはきつと、何かの間違いじゃないか」とでも言うに違いない。

このたび父の終の棲家が解体されて、五十年振りに、ふたたび庭は更地となった。仕方がないこととはいえ、私には、とても不思議な感じがする。そして、この庭を走り回った犬たちのことに思いを馳せると、父と、犬たちのことが、嫌でも思い出されてくる。

君たちにツレなくしたけど、オレも忙しくてなあ……

犬たちに語りかける父の声が聞こえてきそう。それは、私たち子供に語りかける声でもあるかもしれない。

私の 備忘録 より

浦城いくよ

平成二十二年度



平成二十二年度に私が関わった父井上靖および井上家に関する行事について報告いたします。

今年の夏は何十年かぶりの猛暑が続き、熱中症で亡くなられた方が続出しました。

九月の母の三回忌には父母たちが親しくしていただいた方たちにお集まりいただき、両親の形見分けも致しました。

書斎・応接間の旭川市への移築の準備が着々と進む中で、年が明けて思いもかけず世田谷の井上の家が、父の自伝的小説「わが母の記」の映画のロケセットとして使われることになり、一月、二月は寒い中、大変なことでした。賑やかなことが大好きだった父はきつと天上から楽しそうに見ていたことでしょう。

何といっても抜かすことの出来ないのは三月十一日の東日本大震災です。個人的には五月にマレーシア、七月

にはバルト三国とサンクトペテルブルグへ旅行しました。父の「おろしや国酔夢譚」に出てくるエカテリーナ女王の宮殿を見てきました。佐賀や沖縄・石垣島、秋の京都へも忙しい間を縫っての旅行を楽しみました。

平成二十二年

四月十五日

旭川市の西川将人市長、表憲章副市長、立花謙二経済観光部長、河合伸子社会教育部長、荒川美智記念館担当課長が井上宅へ。修一、佳子、いくよ応対。書斎および応接間を旭川市にいただきますと正式に挨拶に来られる。北海道新聞の記者二人も同行される。

四月十六日

昨日の件が今朝の北海道新聞の第一面トップ記事に「井上靖の書斎旭川へ」と掲載される。娘の朋子から午前中に知らせてくる。会社の方が出張してい

た旭川より新聞を持ち帰られたとのこと。

四月二十六日

旭川市井上靖記念館の館報に「移築が決まった家の思い出」をやっと書き上げて投函する。

四月二十七日

オーストラリアでシドニー大学での井上靖賞の授賞式のイベントに力を注いでくれている、いとこの大谷正矩夫妻とアメリカにいる息子の泰三さんを妹佳子宅に招く。大谷正矩の弟大谷光敏夫妻と私も夫妻も参加。六月には佳子夫妻がオーストラリアでの井上靖賞のイベントに参加するため、打ち合わせを兼ねた楽しい夕食会。

五月十二日

東京新聞に「井上靖邸旭川で復元へ」が掲載される。毎日新聞その他にも日

をにおいて掲載された。

五月十六日

長泉町にある井上靖文学館の松本亮三館長から、「中国行軍日記の展示に合わせて小さいイベントをやるから来てください」と電話があり、恒雄、いくよ参加。

劇団「しろばんば」の田村千恵子さんと渡辺雅代さんによる、井上靖のエッセー「夕暮の富士」と詩「落日」「元氏」、湯ヶ島出身兵の両親への便りの朗読が行われ、昔湯ヶ島で作っていた「わさび羊羹」を復元し、その味見が行われた。このイベントについての私の感想とご挨拶をした。

五月十八日

旭川市より表憲章副市長、山崎則明文化振興課長、畑薫スポーツ課長の三人が井上家に来宅。これからの予定を伺う。十月より書斎・

応接間の本や資料のパソコンによるリストの作成や写真撮影。来年五月から解体・移送の作業にかかり、再来年五月六日（靖の誕生日）に公開予定とのこと。こちらも本他に応接間にある品々を旭川に持っていくものとおそうでないものの選別作業をしなければいけない。

五月二十六日

第十五回小西国際交流財団日仏翻訳文学賞授賞式・懇親会。東京会館ホールドールム、十八時より。修一、甫玉、いくよ出席。マリー・ンディアイ原作「心ふさがれて」を翻訳された笠間直穂子氏と、フリップ・フォレスト原作「さりながら」を翻訳された澤田直氏が受賞され、ご挨拶をされた。毎年出席してみようことはきちんとした立派な授賞式であることに加え、懇親会での東京会館のお料理がとても美味しい。

五月二十九日

過日亡くなられた松本亮三館長の奥様のお墓参りに、澤田角江さん、遠藤やえ子さん、篠崎啓史さんと小田原のご自宅のすぐそばにあるお墓へ。みかん山に囲まれたのどかな所。夕食は沼津港にある美味しいお寿司屋で遠藤さんに皆でご馳走になった。篠崎さんが車で送り迎えをして下さった。

六月八日

前田和男氏来宅。芝学園の第三代校長であった渡辺海旭について調べておられる前田氏は、芝学園の卒業生でノンフィクション作家で翻訳家でもある。海旭の親友であった祖父足立文太郎とその娘婿の井上靖について私に話を聞きに来られた。明治三十年代、祖父はストラスブルへの留学時代海旭に出会い、分野は異なるがお互い将来の日本を背負つての留学に意気投合し、親友となった。海旭は解剖学を勉強して

七月二十一日

旭川市井上靖記念館相談役会。井上宅にて十時半より。
相談役会は父が特別会員になっていたクラブ関東で毎年行われてきたが、今回は井上家で行なった。出席者は斉藤淳起井上靖記念館館長、河合伸子部長、荒川美智課長、清水節男氏と私の五名。高野昭氏は風邪のため欠席。
午後からは井上靖ナカマドの会会長の松田忠男氏と副会長の東郷明子さんが旭川からご挨拶に来られた。
夕方からは新財団に向けての打ち合わせをした。修一、甫壬、佳子、いくよ。

七月三十日～八月一日

旭川市井上靖記念館行。十三時旭川着。ホテルに寄って隣の市役所へ。小池語朗教育長、長谷川明彦前社会教育部長、山崎則明文化振興課長らにご挨拶に伺う。教育長室で皆が待つておられる。その後記念館へ。記念館は展示のスペ

いた祖父に死後の献体を申し出て、覚書を書いた。祖父は海旭の死後それを実行した。後に靖はこの話について小説「比良のシヤクナゲ」に書いている。『ふるさと叢書「足立文太郎特集」』や母ふみが文太郎について書いたエッセーなど参考になりそうなものを差し上げた。

六月十九日

修一が大阪の大学を退職して帰ってきたので新財団への移行の件などを話し合う。井上宅にて十三時より。修一、甫壬、卓也、佳子、いくよ。

六月二十四日

中国文学芸術界連合会代表団歓迎レセプション。銀座アスタールホール、十五時～十六時半。いくよ出席。

六月二十五日

財団理事会。山の上ホテル、十六時半

～十七時。

秀彦さんが初めて出席し、新財団に向けて作った定款の案を読みながら説明する。

終了後場所をかえて同ホテルの中華料理での夕食会。

七月十六日

世田谷文学館開館十五周年記念「みんなのサザエさん」展、オープニングレセプション。いくよ出席。

「サザエさん」のマンガと併せて昭和の時代の世相や出来事が写真などで展示され、何とも懐かしい企画展。「いじわるばあさん」など庶民の生活をマンガで描いた長谷川町子の業績が展示されていた。

バルト三国とサンクトペテルブルグの旅から帰国して二日目体調が良くなかったが、友人宮沢依子さんの車で送り迎えで行くことが出来てよかった。

した。この小説を書くに当たり、安藤先生には「鑑真和上伝之研究」をはじめ、いろいろとお世話になった。早稲田大学のお弟子さんたちの「萩の会」から先生を偲ぶ冊子『萩』に原稿を頼まれた。

八月二十九日

井上靖記念文化財団の集まり。井上家にて十四時より。修一、卓也、秀彦、佳子、恒雄、いくよ。
新財団に向けての諸々のことを話し合う。

九月二十五日

母の三回忌。井上家の応接間へ伊豆の妙本寺からお坊さんに来てもらい、お経をあげていただく。我々子供夫婦、孫たちの家族、母の甥・姪夫婦、当時のお手伝いさんたちや母が本当に親しくしていただいた方々に来ていただく。父母が好きで、生前よく出前をして

らっていたうなぎ屋に出前をお願いする。それに加えて、現在のお手伝いさんの斉藤ふみさんに煮物をいろいろ作ってもらった。

二階に、母の着物やアクセサリー、外国からの土産品、日常の品々を沢山ならべて、気に入ったものを皆さんにそれぞれ沢山お持ち帰りいただき、母の形見分けとした。

九月二十九日

「薩摩琵琶で語る平家物語の世界」。東京音楽学校奏楽堂（重要文化財）にて十四時より。恒雄、いくよ出席。

井上靖記念文化賞の時お会いした薩摩琵琶の山下晴楓氏に時々ご招待をしていただき、お蔭で私たち夫婦は今まで触れたこともなかった琵琶の世界に触れることが出来て大変うれしく感謝している。終了後上野精養軒での打ち上げ会にも参加させていただいた。

館が出来て以来二十年近く私は何代にもわたり働いて下さっている職員の方たちから聞かされてきたことを、新しく作る今を置いてはないと一生懸命代弁をする。

その他、移築の場所についても打ち合わせをする。

佳子は久しぶりの旭川だったが、忙しくて館の中での仕事で終わってしまった。

十月十四日～十五日

旭川市から山崎則明文化振興課長が移築に向けて入札で選ばれた業者（柴滝建築設計事務所）の二人と井上宅へ。応接間や書斎のサイズを測ったり、本の奥付をパソコンに入力したり移築に向けての調査をされていた。

十月二十五日

国際交流基金賞授賞式。経団連会館経団連ホール。大谷光敏、佳子、恒雄、

十月一日

難波多津子さん宅へ。花田鷹公氏といくよ。十四時より。

難波さんの亡くなられたご主人が遺された本約一万冊をモンゴルのウランバートル市にあるオルホン大学へ花田氏のお世話で寄贈されることになり、モンゴルへの輸送の準備を始めることになった。井上靖全集他も一緒に送ることになっているので、難波さん宅へ伺って本を拝見する。地下室に山積みされている本を梱包するのは大変な仕事と思う。

世田谷文学館「森鷗外と娘たち展」十七時～十九時。

鷗外の娘さんたちに対する思いと、才能ある二人の娘さんの父への思いがよく伝わってくる素晴らしい企画展だった。後日、恒雄をさそって再度見に行った。鷗外がドイツで覚えてきた森家の料理の中から四品がオープンングレ

いくよ出席。

一九七三年以来毎年学術、芸術などの文化活動を通して日本と海外の相互理解に貢献している個人や団体に与えられる賞。

*本年の受賞者

佐藤忠男氏（映画評論家）

アジア映画研究の先駆者で、日の当たらなかつたアジアの映画に光を当てた日本の各映画祭やテレビでアジアの映画が上映されるきっかけを作った。ベン・H・アミー・シロニー（イスラエル）

イスラエルにおける日本研究の第一人者。一万人くらいの弟子を育てた教育者。

サヴィトリ・ヴィシユワナタン（インド）

日本研究・日本語教育をインドに根付かせ、後進の育成に大きな貢献をした。それぞれの受賞者の話を伺っていると皆さま大変な仕事をされている方ばかり

セブシヨンの時に再現して出された。早速作りたくなるようなものばかり。とても美味しかった。

十月五日～六日

旭川市井上靖記念館行。佳子、いくよ。母井上ふみの展示がされているので佳子と見に出掛ける。母の本や写真がたくさん並べられ、母を通して父や家族が語られていた。

母は八十歳近くになって父が亡くなったからエッセーや短歌の本などを刊行した。今振り返って大した女性だったと思う。

隣の彫刻美術館で市の関係者と移築に關しての打ち合わせと希望を述べる。新しく作る収蔵庫を出来る限り大きく作りその中に展示の仕事をする職員の間やパソコンを置いて仕事をしやすいスペースを作ってあげて頂きたい。現在ある展示のスペースも狭いので広げられるものなら広げてほしい。

り。オーストラリアのシドニー大学での井上靖賞も、団体としていつかはこのような賞を取りたいと願っているが、それは並大抵のことではなさそうだ。

晩秋の木枯らしに散る葉を惜しみ

色とりどりの落ち葉踏み行く

（軽井沢にて）

十一月十一日

新財団移行についての話し合い。井上宅、十四時より。

大谷光敏、修一、甫壬、卓也、秀彦、佳子、恒雄、いくよ。

十一月十二日

国際交流基金へ。十一時より。大塚清吾氏、恒雄、いくよ。

文化事業部の高橋正和氏と洲崎勝氏にお会いする。来年五月、シドニー大学での井上靖賞授与式の時のイベントに父と一緒に敦煌へ旅した写真家の大塚

にして永く続けられる催しなどについて話し合う。

一月二十六日

映画「わが母の記」を支援する会、発足。沼津市商工会議所にて。修一、甫壬、いくよ出席。
顧問に就任する。

沼津市の栗原裕康市長をはじめ、約四十名が出席。地域活性化につながる映画の成功を願っている。富士山がきれいに撮れるかどうかカギらしい。

一月三十日～三十一日

あすなる忌。修一、甫壬、佳子、恒雄、いくよ。

十時から募参。晴天なのにあすなる忌が始まって以来ではないかと思えるほどの寒いお募参り。手や足が冷たい。インフルエンザの流行で参加者が少ないだろうと聞いていたが、七十名くらいの方がお募参りをして下さった。

二月十四日

修一宅。修一、甫壬、卓也、佳子、恒雄、いくよ。

父が中国の方々からおみやげに頂戴した品々、主として絵画や書を日中文化交流協会におられた佐藤純子、木村美智子氏、横川健氏と画商の兒嶋俊郎氏に見ていただく。財団で将来展覧会でもやりたいと話し合う。途中映画の撮影を廊下続きの隣の井上家へ見に出掛ける。
雪が降ってきたので早々に帰宅する。

二月二十一日

国際交流基金地球市民賞授賞式、レセプション。国際文化会館、十八時三十分～二十一時。

日本国内で外国人を支援している団体や組織に贈られる賞。三つの団体に贈られた。熱心にいろいろな活動をしている人々が居られることが紹介の映像を通してよく分かった。受賞された皆

伊豆市の方々、ふるさと会の方々、ネットの方々、「わが母の記」の映画関係者、井上家。読書感想文も例年通りお供えされた。

十一時から読書感想文コンクールの表彰式。

午後からは映画「おろしや国酔夢譚」が上映される。

昼食はふるさと会の方々手作りのカレーライス、ぬた、サラダなど御馳走になる。どれも美味しい。

夜は船原館で美味しいわさび鍋を食べながら、ふるさと会会員、ファンの方々、私共もまじっての懇談会。市長さんも最後までおられ、楽しい集いだった。

翌日は昨日とは変わり暖かな天候。十時から湯ヶ島倶楽部で伊豆市の方々打合せ。

湯ヶ島にある井上家の跡地を伊豆市に寄付したい旨お伝えする。

さんは本当にうれしそうだった。

二月二十三日

映画「わが母の記」の井上家での撮影は今日で終了。二十時頃から全員で記念写真を撮るので集合ということので十八時頃井上家へ行く。百人近くのスタッフの方々がそれぞれの仕事で忙しう。とにかく寒い。応接間では演技が続き、マイクとカメラだけが入っている。監督さんは別の部屋でディスプレイを見ながらマイクを使って指示をされている。私は庭から応接間の中を窓越しに覗いてみた。記念写真は二十時半頃撮影した。撮影は夜中まで続いたそうだが私たちは二十三時頃帰宅。撮影に使用して、もういらなくなった鉢植えの花を沢山いただいた。翌日庭に植える。

いそとせ
五十年経し家すでに主あらず

ロケのセットとなりてにぎわう

朝冷の募参に集う七十余名

天城連山朝日に照りて

二月二日

映画「わが母の記」撮影のリハーサル。世田谷の井上家をロケセットとして使用して撮影することになった。今日はそのリハーサルがあり、出演者たちも来られるというので午後から恒雄と見物に行く。家の中はすっかり変わっていた。物語の時代にあうように作り変えられている。現代風の暖房は全部外され、サッシュも木枠に替えられ、家具もすっかり違ったものが置かれている。八十人くらいのでガラス戸は開けっぱなしで、とにかく寒い。リハーサルは応接間でなんとわが娘朋子のお食い初めのシーンが演じられていた。

二月二十八日

昨日から軽井沢山荘での撮影。冬の軽井沢へ撮影見物を兼ねて行ってみる積りだったが、雪が降るといいうので中止した。修一夫妻が行く。
『伝書鳩』を校正する。

三月一日

引き続き『伝書鳩』の校正をし、投函する。

三月三日

米子市にあるアジア博物館・井上靖記念館の友の会会報『海鳴り』に原稿「近況報告」を書き、遅くなってしまうが急ぎ投函する。

伊豆市の方々、井上家に来宅。修一、甫壬、佳子、いくよ。

湯ヶ島の井上家跡地の伊豆市への寄付申し出の返事に来られた。土地の寄付は可能とのこと。細かいことは後のこ

ととする。

三月九日

劇団前進座創立八十周年記念パーティー。東京会館、十八時〜二十時。恒雄、いくよ出席。

関係者のご挨拶を聞いてみると大変な苦勞の歴史があることが分かった。昭和四十五年には父や松本清張氏、大仏次郎氏らが劇団を励ます会「矢の会」の発起人になっている。「天平の甍」は中国公演も行われ、私も上海へ出かけて観劇した。前進座の座付作者津上忠氏は一月の出版記念会でお目にかかったが、脚本家の十島英明氏には上海以来久しぶりにお目にかかり、十島氏も大変喜んでおられた。とても華やかな会だった。

三月十一日

東日本大震災。地震の時は一人で在宅。中二階にある

私の部屋にいたので、長い揺れに机の下に入った。本に囲まれた部屋だが一冊の本も本棚から落ちなかった。揺れが収まってすぐに一階に降りたが、何も壊れていなく、ホッとしたが、お雛様が一人倒れていた。私の部屋は下がピロティになっているので家中で一番壊れやすい場所で、後で気が付きゾツとした。

長きゆれ机にもぐる吾ひとり
地震の止みてテレビに飛びつく
三月十五日
オーストラリアで五月に開かれる「井上靖賞授賞式」での挨拶の原稿を書き、メールでオーストラリアの大谷に送る。

三月二十九日
井上靖記念文化財団理事会。山の上ホテル、十六時〜十八時。
平成二十二年度の最後の理事会。

図書だより①

◎二〇一〇年四月以降に発表された井上靖に関係する書籍、論文、記事をご紹介します。なお、『井上靖研究』十号は、『図書だより②』（六十二頁）に目次を掲載しています。

【書籍】

- 藤澤全『詩人・井上靖——若き日の叙情と文学の原点』二〇一〇年九月、角川学芸出版
- 池島信平・嶋中鵬二『文壇よもやま話』下、二〇一〇年十一月、中公文庫

【論文・記事】

- 平山郁夫・井上靖「本誌に載った平山郁夫対談アーカイブス（第二回）井上靖——文学、絵画、考古学と冒険と……」（『月刊美術』二〇一〇年四月）
- 重里徹也「古代史小説の風景（第二回）井上靖『額田女王』」（『季刊邪馬台国』二〇一〇年七月）
- 海老原早苗「井上靖『敦煌』について」（『別府大学国語国文学』二〇一一年二月）

*議題

- 平成二十三年度事業計画
- 平成二十三年度予算
- 評議員の改選
- その他

終了後同室にて和食をいただきながら、静岡がんセンター総長の山口建先生にそれぞれが気になる自分の病気や体調について伺う。外来では担当医が忙しくてなかなかゆっくり聞けないことを大先生に伺えたと誰かがお礼を言っておられたが、父のファンである先生は「これも井上先生のお蔭です」と冗談を言われていた。

三月三十一日

旭川市井上靖記念館会報に「わが母の記」の映画化についてというテーマでの依頼に、「ロケセットになった井上家」をやっと書き終え、メールで送る。

○工藤茂「井上靖研究会の発足」（『別府大学国語国文学』二〇一一年二月）

○工藤茂「井上靖『四角な船』考——その選ばれた者たちをめぐる」（『別府大学国語国文学』二〇一一年二月）

○田梅・邢永鳳「井上靖の『孔子』と『論語』」（『アジアの歴史と文化』山口大学アジア歴史・文化研究会、二〇一一年三月）

○角替茂二「お茶と文学者（第五十五回）井上靖——サンフランシスコ万博（1）」（『茶』静岡県茶業会議所、二〇一一年九月）

○角替茂二「お茶と文学者（第五十六回）井上靖——サンフランシスコ万博（2）」（『茶』静岡県茶業会議所、二〇一一年十月）

○角替茂二「お茶と文学者（第五十七回）井上靖——サンフランシスコ万博（3）」（『茶』静岡県茶業会議所、二〇一一年十一月）

事業報告

井上修一（井上靖記念文化財団理事長）

平成二十二年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

（一）井上靖を記念する文化賞

平成十九年度に十五回を一区切りとして終了した文学、美術、歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」を、一般財団に移行後に、復活させることを考えています。賞の名称ならびに内容等の変革も含め検討中です。

（二）海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助

「井上靖（奨学金）賞」は平成十八年にオーストラ

リアにおける日本文学の研究奨励のために、設立資金五十万円をシドニー大学に寄付し、設立したものです。奨学金授与対象者はシドニー大学の井上靖（奨学金）賞選考委員会にお願いしてあります。今年度はその第四回になりますが、シドニー大学のマット・カーソン博士（論文“Writing Madness: Deranged Impressions in Akutagawa's Cogwheels and Strindberg's Inferno”）によりあげることになり、平成二十二年六月十一日、シドニー大学・国際交流基金シドニー・本財団共催、NSW 豪日協会・シドニー日本人会後援で、国際交流基金シドニー多目的ホールにて授与式が行われました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

世田谷区にある井上靖邸の一部（書斎と応接間）を旭川市立「井上靖記念館」脇に移築して今後の維持管理・保存公開を旭川市に託すことになり、受け入れ先の旭川市と協議を重ねた結果、二十三年度中に移築し、二十四年の父の誕生日、五月六日に一般公開することになりました。

また伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内の「しろばんばの碑」の管理をするとともに、次のような事業を行いました。

平成二十二年三月十八日から八月三十一日、長泉町「井上靖文学館」において、「井上靖ふるさと会」と本財団の後援で「ふるさとへの想い、帰還展——特務兵・井上靖、湯ヶ島から出征した人々の記」を年度をまたいで開催いたしました。

平成二十二年四月一日、日南町美術館（井上靖文学室）との展示資料寄託契約により資料展示に協力しました。

平成二十二年四月一日、旭川市立井上靖記念館と展

示資料寄託一年契約を更新するとともに、資料展示に協力しました。

平成二十二年六月一日、旭川市『井上靖記念館報』第十号が、本財団の協賛で発行されました。

（四）井上靖に関する資料の収集及び調査研究

蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。特に前項（三）の事業を行うに当たり、資料的側面を担当しました。

平成二十二年九月二十三日から三十日、第七十六回「国際ペン東京大会」（国際ペン、社団法人日本ペンクラブ主催）が早稲田大学、京王プラザホテル東京で行われ、本財団も協賛しました。

平成二十二年十二月、「井上靖研究会」（國學院大學教授・傳馬義澄会長）の機関誌『井上靖研究』刊行のために十万円の助成をいたしました。

平成二十三年三月、財団の事務所があります駒場の日本近代文学館に、資料収集用の資金として十万円の助成をいたしました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

平成二十二年六月七日、前項(二)の国際交流基金シドニー多目的ホールでの授与式の後、本財団派遣の黒田佳子氏による講演(トークと井上靖の詩の朗読)と、井上靖原作映画「千利休・本覚坊遺文」(一九八九年、東宝)の上映が行われました。

平成二十二年七月二十四日、井上靖研究会の夏季研究発表会が立命館大学衣笠キャンパスで行われ、本財団からも参加いたしました。三谷憲正氏の研究発表「井上靖『獵銃』の方法」と、木村一信氏の講演「井上靖と中島敦」が行われました。

平成二十二年十二月五日、井上靖研究会の冬季研究発表会が國學院大學渋谷キャンパスで行われ、本財団からも参加いたしました。小林幸夫氏の研究発表「『獵銃』論」と、芥川喜好氏の講演「美術記者、井上靖」が行われました。

平成二十三年一月三十日、「あすなる忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館(長泉町)共催、伊豆市・本財団等の後

援で催されました。伊豆市湯ヶ島の墓地にて墓参会があり、引き続き「天城温泉会館」にて、井上靖作品読書感想文コンクール最優秀賞作品の発表と表彰が行われ、井上靖原作映画「おろしや国酔夢譚」(角川映画、一九九二年)の上映が行われました。

(六) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催しがありました。

○旭川市立「井上靖記念館」

平成二十二年四月十日から六月二十日、第一回企画展「美の遍歴——井上靖 美術エッセイ」

平成二十二年六月二十六日から八月一日、第二回企画展「旭川の文学を育んだ佐藤喜一展」

平成二十二年八月七日から十月十一日、第三回企画展「井上靖と家族——ふみ夫人を中心に」

平成二十二年九月四日、第一回文学講座、講師・石本裕之氏「『天平の甕』若き留学僧の群像」

平成二十二年十月十六日から平成二十三年一月二十三日、第四回企画展「『天平の甕』展」

平成二十二年十二月四日、第二回文学講座、講師・片山晴夫氏「『物語』を考える——井上靖「獵銃」の闇について」

平成二十二年十二月三十日、井上靖記念館内「ナナカマドの会」による『赤い実の洋燈』三十七号発行

平成二十三年一月二十九日から三月二十七日、第五回企画展「『氷壁』展」

平成二十三年一月二十九日、第三回文学講座、講師・伊藤一男氏「『額田女王』の万葉歌」

○長泉町「井上靖文学館」

平成二十二年十月九日から平成二十三年三月三十一日、企画展「魂魄飛びてこころやすらぐ」井上靖 詩星のまたたき」

○大黒屋光太夫記念館

平成二十二年十月六日から十一月二十八日、鈴鹿市

の大黒屋光太夫記念館開館五周年記念展「海の向こうへのあこがれ——漂流記と漂流文学」

(七) 役員

平成二十三年四月一日現在、本財団の役員(理事、監事)、評議員は次の方々です。

理事長	井上修一
常務理事	浦城幾世
理事	井上卓也 相賀昌宏 岡野光喜 角川歴彦 黒井千次 佐藤隆信 三木啓史 三好 徹
監事	山口 建
評議員	水谷大介 伊藤 暁 井上甫壬 浦城義明 大越幸夫 大谷光敏 大波加弘 狩野伸洋 黒田佳子 小西龍作 佐藤純子 篠 弘 曾根博義

(五十音順)

なお、平成六年より理事をお願いいたしております

た野間佐和子氏が平成二十三年三月三十日に、財団設立当初より理事をお勤めいただきておりました高碓芳郎氏が平成二十三年四月十日に、また財団設立当初より評議員をお願いいたしておりました高野昭氏が平成二十三年四月二十六日に、それぞれご逝去になりました。生前の長期に亘る多大なご尽力・ご指導に対し心より感謝いたしますとともに、深く哀悼の意を表させていただきます。



◎『井上靖研究』第十号記念号（井上靖研究会、二〇一一年七月）の目次を紹介いたします。

【論文】

- 藤澤全「詩美の狩人——ヴァレリーの「純粹詩」論を書いた頃」
- 小田島本有「敦煌」論——〈約束〉をめぐって」
- 顧偉良「遙かなる呼び声・記憶の旅——『異国の星』をめぐって」
- 綾目広治「井上靖・昭和三〇年代の新聞現代小説——不倫で至純な恋愛物語」
- 小関一彰「井上靖と母——『わが母の記』（「花の下」）」
- 高木伸幸「蒼き狼」と井上靖——〈血統〉〈家系〉および父子関係」
- 西座理恵「様々な〈後白河院〉像からの考察——井上靖、加藤周一、山崎正和の作品を通して」
- 新井巳喜雄「井上靖と川——人生を生きる美学」
- 李哲権「二つの遺書が織りなすテキスト（下）——

井上靖の『狼銃』と夏目漱石の『こころ』における包むもの」

【エッセイ】

- 井上修一「井上靖の詩の構造——ちよちよっと」
- 笹本正樹「井上八重さんの思い出」
- 小松弘愛「老いの名詩——井上靖「ヘルベスの春」を読んで」
- 小野寺苓「七十一歳の童話」
- 金子秀夫「井上靖『化石』を読む」
- 木村雄次「楼蘭」から「風濤」へ」
- 瀬戸口宣司「井上靖 詩にみる哀しみ」
- 秋岡康晴「市民サークル旭川井上靖読書会からの報告」

【新刊紹介】

- 瀬戸口宣司「藤澤全著『詩人 井上靖 若き日の叙情と文学の原点』」

編集後記

私の知るかぎりずっと、祖父母の家は親族の中で「世田谷」と呼ばれ、何かにつけて、皆が集まっていた。私の実家、つまり両親の家も世田谷にあるのですが、これは「世田谷」ではなく、単に修一の家でした。

三年前に祖母が亡くなり、主のいなくなった「世田谷」は寒々としていました。しかし映画「わが母の記」の撮影準備が始まり、沢山のスタッフの方々と賑わい出すと、がらんどろだった家がまるで息を吹き返したかのよう。華々しい姿をもう一度、私たちに見せてくれました。

この秋に、「世田谷」はとうとう世田谷から姿を消しました。移築先の旭川の井上靖文学館でも、活躍してくれることを期待しています。

現在、祖父母の家の跡地の横に、両親の家がぼつんと建っています。少しずつ、この修一の家が、「世田谷」になっていくのかもしれない。

西村承子



伝書鳩 第12号

発行 二〇一一年十二月十七日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九

印刷所 (株)シナノ

発行所 (財)井上靖記念文化財団